



（本の表紙：『Frauen vergibt uns』（『女性たちよ、私たちを赦してください！』）、第3版・改訂増補——私たち男性が償わなければならないこと。女性と男性の役割について——Hans-Jörg Ronsdorf）

FRAUEN, VERGEBT UNS!（女性たちよ、私たちを赦してください！）

私たち男性が償わなければならないこと

女性と男性の役割について

Hans-Jörg Ronsdorf

ペーパーバックのご注文は www.frauen-vergebt-uns.de から

13.80ユーロ（送料別）。

第3版（増補版）、2021年11月

© Hans-Jörg Ronsdorf——無断転載を禁じます。

Albis 6 1/2

87477 Sulzberg

組版：Hans-Jörg Ronsdorf（Papyrus Autor使用）

連絡先メール：hj-ronsdorf@t-online.de

ISBN 978-3-9820715-5-8

表紙デザイン：トビアス・シュトリッカー（Tobias Stricker）

図版：ラウラ＝クリスティン・ロンズドルフ（Laura-Kristin Ronsdorf）

印刷：www.wir-machen-druck.de

特に断りのないかぎり、使用している聖書翻訳：

エルバーフェルト訳（Elberfelder Übersetzung、ドイツ語聖書翻訳）、Edition CSV
Hückeswagen

愛する妻に、

すばらしい娘たちに、

敬愛する母に、

祖母たちに、

姉妹に、

キリストにある

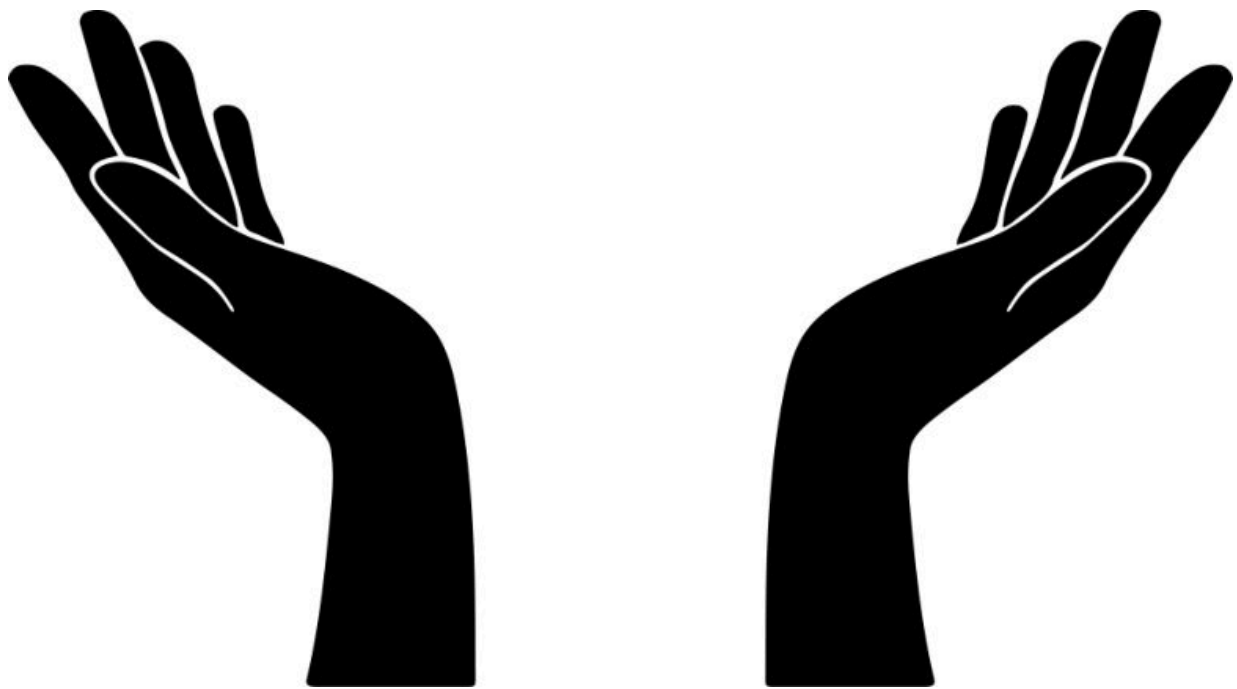
姉妹たちと友人たちに、

エバのすべての娘たちに——

私がともに

神の王国のために働いてきた、

そしてこれからともに仕えていく人たちに。



目次	ページ
1 序文	13
1.1 第2版（増補版）への序文	17
1.2 この本を書いている者	18
2 創造と墮落	24
2.1 すべてはどのように始まったか	25
2.1.1 第六日の御業	26
2.1.2 人間——神のかたち（imago Dei）	27
2.1.3 男と女としての人間	28
2.1.4 人間と神の委託	29
2.1.5 アダムとエバの創造	31
2.1.6 ヘブル語の鍵となる語についての短い補説	32
2.1.7 アダムは助けを必要としている	33
2.1.8 エバが造られる	36
2.1.9 あばら骨から	37
2.1.10 「男から取られた女」（Männin）	39
2.1.11 互いのために与えられた者	41
2.2 男と女の墮落	44
2.2.1 エバの答え	47

目次	ページ
2.2.2 エバの苦しみ、妊娠、そして服従	48
2.2.3 あなたは彼を恋い慕うが、彼はあなたを支配する	53
2.3 平等に対する異論	57
2.4 違いと役割分担	61
2.5 創造の秩序	65
2.5.1 エデンの園から新しいエルサレムへ	68
2.6 彼はあなたを支配する——その歴史	69
2.6.1 古代	70
2.6.2 アリストテレス	71
2.6.3 所有物としての女性	73
2.6.4 家父長制	74
2.6.5 ユダヤ思想におけるギリシアの影響	75
2.6.6 教父たち	76
2.6.7 宗教改革	78
2.6.8 世俗の女性の権利運動	80
3 メシアであるイエスと女性たち	84
3.1 仕える女性の弟子たち	86
3.2 女性は学ぶべきである	87
3.3 みな等しい	87
3.4 月経はもはや汚れではない	88
3.5 追い出され、見いだされて	89
3.6 姦淫には二人が必要	90
3.7 まっすぐに、背丈いっぱい立つ	92
3.8 二重基準なし	93
3.9 あつかましいほどの恵み	93
3.10 十字架——男たちはどこにいるのか	95
3.11 女性使徒マリア	96
4 女性の友パウロ	100
4.1 ルディア	101

目次	ページ
4.2 フィベ	103
4.3 プリスカ	105
4.4 ユニア	106
4.5 マリア、ツルパイナとツルボサ、ペルシス	108
4.6 ユウオディアとシンティケ	109
4.7 クロエ	109
4.8 ニンファ	110
4.9 乳を飲ませる母、パウロ	112
5 結婚における男と女	115
5.1 古代の家とその規則	115
5.1.1 新約聖書の家庭訓	117
5.1.2 キリスト教の家庭訓の影響	118
5.1.3 エペソ人への手紙5章の家庭訓	120
5.1.4 互いに従うことの根拠	121
5.1.5 キリスト者の生活のための指示——今日	124
5.1.6 古代の家における女性	125
5.2 かしらと服従——エペソ人への手紙5章	127
5.2.1 かしら	128
5.2.2 古代の家族	128
5.2.3 文字どおりに受け取るべきか	129
5.2.4 文脈化	132
5.2.5 もう一度、かしらについて	133
5.2.6 結論	135
5.3 従順であること	138
5.3.1 まとめ	145
6 教会における男と女	149
6.1 コリント第一11章——かしら、髪、ベール	152
6.1.1 テキスト解釈の指針と注意点	153
6.1.2 テキストの適用範囲	154

目次	ページ
6.1.3 一つのかしらを持つ三つの組	156
6.1.4 かしらとは何を意味するのか	157
6.1.5 コリントにおける頭のかぶり物	162
6.1.6 頭に権威のしるしを持つ？	166
6.1.7 今日における意義	167
6.1.8 説明的な言い換え	168
6.1.9 結びと要約	171
6.1.10 コリント第一11章の別の読み方	173
6.1.11 引用の例	173
6.1.12 コリント第一11:2-16の別訳	175
6.1.13 まとめ	177
6.2 語らずに、黙っていなさい	182
6.2.1 問い	183
6.2.2 章の終わりでの戸惑い	185
6.2.3 引用としての読み方	186
6.2.4 ローマの法律？	190
6.2.5 決してそうではない！	191
6.2.6 ほかのもっともらしい説明	192
6.2.7 従順な女性たち	195
6.3 女性は教えてもよいのか	199
6.3.1 テキスト——テモテ第一2:8-15	200
6.3.2 エペソの歴史的状況	201
6.3.3 場面設定	203
6.3.4 どこでも祈ること、怒り、装身具	204
6.3.5 静かにして、従順に学ぶこと	206
6.3.6 教えたり、男を支配したりしないこと	207
6.3.7 教えることは支配することなのか	207
6.3.8 「支配する」とは何を意味するのか	209
6.3.9 エペソにおけるアダムとエバ	212

目次	ページ
6.3.10 私は今は許していない	213
6.3.11 子を産むことによる救い？	214
6.3.12 今日のテモテ第一	216
6.3.13 結論	217
6.3.14 テモテへの手紙のテキストの説明的な言い換え	218
6.4 普遍的な命令と時代に縛られた命令	220
6.4.1 聖書主義と「聖書のみ」	221
6.4.2 文字どおりに受け取ることと字義的意味	224
6.5 女性の祭司、女性の長老、女性の執事	225
6.5.1 全信徒祭司性	226
6.5.2 男性の長老と女性の長老	227
6.5.3 彼女はりっぱな働きを求めている	228
6.5.4 女性執事	230
6.5.5 女性の説教者	232
6.5.6 総括	234
7 「キリストにあって一つ」——ガラテヤ3:28	236
7.1 テキストは何を語っているか	237
7.2 テキストが直接には語っていないこと	238
7.3 それでもテキストが間接的に語っていること	239
7.4 ユダヤ人とギリシア人	240
7.5 奴隷と自由人	240
7.6 奴隷制についての情報	241
7.7 男と女	242
7.8 地上的なことと霊的なこと？	243
7.9 男も女もない	244
7.10 要約とまとめ	245
8 父なる神、子なる神、聖霊なる神	247
8.1 神は男性なのか	248
8.2 あなたは自分のために像を造ってはならない	250

目次	ページ
8.3 女性的な神のイメージ	251
8.4 父と子	252
8.5 永遠の御子の服従？	253
8.6 イエスと12人の弟子	256
8.7 まとめ	258
9 私の罪の告白	259
9.1 まとめと展望	264
9.1.1 注意点と助言	268
10 違い	271
11 さまざまな読者からのあとかき	275
11.1 自由な視界がふさがれてしまった！	275
11.2 何が可能だったことか！	278
11.3 「女性問題」と「兄弟姉妹の愛」	280
11.4 変化	282
12 最終弁論——女性の問題はそれほど重要なのか	284
12.1 問題はいくつかの（禁じられた）奉仕ではない	284
12.2 男性が感じること、感じないこと	285
12.3 女性の問題において、私たちは聖書をどう読むか	286
12.4 感受性	287
12.5 私が問題にしていないこと	288
12.6 分裂の理由？	288
12.7 女性たちは立ち上がらなければならない	289
12.8 やがての日と今	290
13 参考文献	291
13.1 著者の本	294
14 推薦図書	295
15 自分用のメモ	300

1 序文

このいつまでも尽きない話題について、また一冊の本を？ それについてはもう言い尽くされ、書き尽くされているのではないか。また論争するのか、それとも論争を続けるのか。信仰を弁護するためには、護教的なテーマのほうが大切なのではないか。けれども私には、このテーマもまた護教（アポロジェティクス）に属するのだということが分かってきました。それは、ポストモダンの世俗社会において、しかしまた保守的で聖書主義的なキリスト教の内部においても、普遍的な倫理規範を弁護することなのです。後者についてもそうであるのはなぜか、はっきりと示していくつもりです。

この問題をめぐる小競り合いや争い、そして無理を重ねる努力は、この本がなくても続いていきます。それは今なお教会を分裂させています。ある人々は、礼拝で女性の声をそもそも聞いてよいのかという問いですでに分裂します。ほかの人々は、女性執事や女性長老（Ältestinnen）¹を置いてよいのかという問いで分裂します。あるいは、女性が指導的な役割を担い、説教してよいのかという問いで分裂するのです。

私たちの頭の中には、要塞のように攻め落とすことのできない立場があります。神のことは、あらゆる時代精神に逆らって、文字どおりに受け取られなければならない、という立場です。そして、それが今日の私たちにとって文字どおり守るべきものなのかどうか、疑問や疑いを抱いている人々がいます。

この本の中で、私はこのテーマについての自分の研究をまとめています。このテーマについての文献をよく知っている方は、新しい発見はほとんど期待できないでしょう。また、きわめて保守的なものからきわめて進歩的なものまで存在するあらゆる立場を検討するものでもありません。この本は、結論を開いたままにした研究では**ありません**。それは一つの明確な立場であり、私はそれを見だし、根拠づけるのに何十年もかかりました。それは、私がかつて学び、主張していたこととは異なっています。

それを説明するのに一冊の本が必要なのでしょうか。それほど複雑なことなのでしょうか。答えは「はい」でもあり「いいえ」でもあります。アメリカで死刑囚に見られるような冤罪の歴史を追ってみると、無実を証明するためには、多くの場合、証拠固めと状況証拠の収集に膨大な労力が必要です。しかし、ときには遺伝子検査一つで十分なこともあります。どれほど労力がかかるとしても、30年、40年、50年を経て釈放されるそうした死刑囚たちの顔を見てください！ そのように、この本の中には単純な考えもあれば、ときにはもう少し複雑な考えもあります。聖書はいつも簡単に理解できるわけではありません。そう考えるのは思い違いでしょう。漁師であり使徒であったペテロでさえ、パウロの手紙について、理解しにくいところがあると述べています（ペテロ第二3:15）。

この本が読まれれば、反論や論駁や憤慨がほどなく寄せられることでしょう。私はこうした仕組みをよく知っていますし、私自身もその一部でした。たとえ考えを改める人が出なくても、少なくともこのテーマが話題に上ることにはなります。

ちょうど私がこれらの行を書いている今も、アメリカの福音派の世界では、このことがまたしても激しく議論されています。私はこの本を感情を交えずに書いたとは言えません。それでも、事実

に即した態度を保とうと努めました。それは読者の判断にお任せします。

そして、もちろん、別の意見を持つことが十分にありうる点もあります。そのような点では、私の理解において聖書全体の大きな像に合うように、私なりの判断を下しています。

私の心にかかっているのは、イエスに従っている多くの女性たちと、関わりのある男性たちです。彼らは、この性別役割のテーマと、語ること・教えること・指導することの禁止を、疑わしく重荷であると感じています。一方では聖書を真剣に受け止めたいと願いながら、他方ではそれを実行することができないからです。さらに、少なからず重要なのは、この問題において私たちが世からどのように見られているかということです。私たちが福音を届けようとしている、その世から。

神は私たちにとって、これほど難しくされたのでしょうか。何百万時間もの研究と祈りと議論がこれらの問いに費やされることが、神の意図なのでしょうか。分裂を受け入れ、一致を犠牲にすることが？

私は確信しています。そしてこの本は、これらの問いがきわめて今日的なものであるということのための私の弁論です。なぜなら、もし女性が階層的に男性の下に立っており、それゆえ教会での彼女たちの奉仕が制限されているのだとしたら（ほかにも公でない奉仕は数えきれないほどある、といくら断言されても）、そして私たちが間違っているのだとしたら、神よ、私たちをあわれんでください、ということになるからです。

これは従順の問題です。両方の性にとっての問題です。律法主義的で、奴隷的で、恐れに満ちた従順のことではありません。

この本は、およそこの40年間の私の研究と、数えきれない会話と、インターネットのフォーラムでの議論をまとめたものです。私はほかの人々から多くを学ぶことができました。

私は聖書的な道を示そうとしています。できるかぎり分かりやすく説明します。ときには、ある方々にとっては複雑すぎることもあるかもしれませんが。そのときは、そこを脇に置いて次の章を読むことをお勧めします。私は神学者として書いているのではありませんし、神学者のために、あるいは自分は神学者だと思っている人々のために書いているのでもありません。私が思い浮かべているのは、長い間ともに歩んできた人々、そして新しく信仰に入り、私が教えをもって仕えるべき人々です。この本が男性にとっても女性にとっても助けとなることを、私は願い、祈っています。

聖書のことばの中には、新たに考え直さなければならないものがあります。このようなことが起こるのは、これが初めてではありません。ある人々にとっては、聖書テキストの新しい解釈は思い上がった、疑わしいものです。境界線が動かされてしまう、というのです。しかし、「**宗教改革の伝統に立つと自認する神学にとって、習慣を問い直し、聖書テキストを新たに読むことは、その本質に属している**」のです。²

この本の中には、たくさんの引用があります。これらの貴重な考えの多くを私は英語圏で見いだしました。それをドイツ語圏の読者にも届けたいと思っています。

最後に。**私たちの神学は誤りのないものではありません。決して。**私たちがどれほどそう願ったとしてもです。この本も、すべての本と同じように、誤りと弱さと長所を持っています。この本についても、ほかの人ならもっとうまく書けたらというところが当てはまります。考えや訂正や助言やあとがきを寄せてくださった、関わってくださったすべての姉妹兄弟に感謝します。特に、校閲を担当してくださったコニー・エンドレス（Conny Endrös、アルゴイ地方ケンプテン近郊のラウベン）とベルント・ヒュスケン（Bernd Hüsken、シュヴェルム）に感謝します。そのことは私を喜ばせ、また、私が育ち、良い霊的な影響を受けたシュヴェルムでの青年時代を思い出させてくれます。

Hans-Jörg Ronsdorf

アルゴイ地方ズルツベルク、2020年11月

あなたのおきてを私は喜び、あなたのことばを忘れません。

あなたのさとしは私の喜び、私の助言者です。

私はあなたの命令の道を走ります。あなたが私の心を広くしてくださるからです。

詩篇119篇16節、24節、32節（チューリッヒ聖書〔Zürcher Bibel、ドイツ語聖書翻訳〕）

1.1 第2版（増補版）への序文

第2版にあたって、私は軽い改訂と補足を行うことにしました。いくつかの訂正、しかしそれ以上に補足と文体上の改善が必要だと感じていたのです。

主に、このテーマについての三つの中心的なテキストを扱う章に手を入れ、補足し、しかしできるところでは短くもしました。特に、かしら、髪、ベールについての章がそうです。

初版の発行後、私はさらに多くの資料に目を通し、自分でも資料を作成しました。それらは私のホームページ www.frauen-vergebt-uns.de から無料でダウンロードできます。

アメリカでは、このテーマについての新しい本がほとんど毎月のように出版されています。それらはたいいてい神学的に質が高く、新約聖書のテキストに取り組んでいます。それらは、私がこの本で述べようとしていることを裏づける仕方で、このテーマを照らし出しています。人生のあらゆる領域において男性と女性が完全に同等であることは神のみこころである、と私はこれまで以上に確信しています。

この聖書の真理が、結婚に、家族に、そして教会に癒やしをもたらすことを、私は願い、祈っています。ひょっとすると、この本は今になってようやく、あるべき姿になったのかもしれませんが。しかし、それは今なお誤りうるものであり、真理そのものではなく、私の解釈です。

Hans-Jörg Ronsdorf、ズルツベルク、2021年7月

第3版は、需要の高まりによって必要となりました。同時に私はこの機会を用いて、さらに小さな訂正と補足を行いました。この本の主張は何も変わっていません。このテーマがますます話題に上るようになり、主にある姉妹たちが自分の召命が何であるかをますます理解するようになっていくことを、私はうれしく思います。

Hans-Jörg Ronsdorf、アウクスブルク、2021年11月

1.2 この本を書いている者

たいていの場合、本の内容はその著者よりも大切です。しかしこの場合、保守的なキリスト者の間でこれほど繊細なテーマを扱うにあたって、私はこの本を書いているのがだれなのかを読者にお知らせしたいと思います。そして、彼がここで述べられている立場にどのようにして至ったのかを。

私は36歳になるまで、妻と5人の子どもとともに、（閉鎖的で排他的な）ブレザレンの集会（Brüderversammlung）に属していました。それは「古い集会」（Alte Versammlung）としても知られています。彼ら自身はそのようには名乗っていません。あらゆる「名称」を拒んでいるからです。これらの集会、すなわち礼拝において、女性は黙っています。女性は参加しません。ほとんどいつも男性と女性は分かれて座ります。女性は礼拝でズボンをはきません。女性は頭をおおいます。

その後私たちは、1980年代の神の働きにさかのぼる、アルゴイ地方の教会（運動）の一員となりました。そこでは、いくつかの教会で、女性が声に出して祈ったり、証しをしたり、賛美の歌を提案したりすることが許されていました。私の過去のゆえに、私はそれに抵抗を感じていました。コリント人への手紙第一14章が女性に黙っているよう命じているからです。

何年かして、私はこの問いにもう一度向き合い、聖書を徹底的に調べました。そして実際に、女性が声に出して祈り、証しをし、歌を提案できるというこの実践は、十分に聖書的事実であることが分かったのです。私の根拠は、この後の章に記されています。

私は彼女たちの参加を、ますます肯定的なものと感じるようになりました。すでにここで、私の聖書研究はこの肯定的な態度によってその方向へと影響を受けていたのだ、という異論が出るかもしれません。無意識のうちにそうであった可能性はあります。意識的にはそうではありませんでした。なぜ私の確信が変わったのか、その理由をはっきり示していきます。

さて、この教会では、女性は説教をせず、女性執事にも女性長老にもなることを許されていませんでした。親しい関係にあるほかの教会でもそうでしたし、今もそうです。いくつかの教会では、姉妹たちは黙ってさえいます。それは、ドイツの自由ブレザレンの集会や、ザルツブルク地方のある教会の流れの影響、あるいはそれらとの近さによって説明できます。

何年か前に、私はこの教会を離れました。ここでのテーマには何の関係もない理由からです。それは、ほかの人々も経験してきたある体験へとつながりました。空間的にも時間的にも距離を置くことで、長年自分が属していたものに対して、新しい、分析的な視点が開かれたのです。私はそこで7年間長老を務め、この女性の役割についての見方を自ら持ち、擁護し、実践していました。

しかし距離を置いたことで、この問いについて新たに考えることができるようになりました。共同体からのこうした外的な圧力がなくなって、私は時とともに別の認識に至りました。おそらく、距離がなければそれは不可能だったでしょう。

私が読者に隠さないこの考えの変化の過程を、衰退、背教、世俗化として意図的に否定的に解釈することもできるでしょう。私は、こうした思考パターンや、ほとんど「預言者的」と言えるほどの動機の決めつけを、若い頃からよく知っています。それらは強く、深く根を下ろしています。そこから抜け出すのは容易ではありません。私自身、その積極的な一部でした。

これが、私の教会としての状況と過去です。聖書は、教会生活において大きな自由を与えています。集まりの形は定められていません。唯一の正しい道というものはありません。そう信じているキリスト者がいるとしてもです。礼拝の形——そして実にさまざまな形があります——は自由なのです！ その中での女性の役割が、この本のテーマです。

私という人間について、もっとも大切なことがまだ欠けています。いや、むしろ、私の人生においてもっとも大切な人と言うべきでしょう。私の妻クリスティーネ（Christine）です。彼女のために、私は父と母を離れ、彼女と人生をともにしてきました。私たちには5人の成人した子どもがいます。私の妻は強い人格の持ち主です。戦うことのできる、雌ライオンのような母です。賢い女性です。主にある私の兄弟たちの多くが自分の妻に感謝しているように、私も何にもまして彼女に感謝しています。彼女は、性別をめぐる問いについての私の個人的な認識の旅の一部です。彼女がいなければ、私は今日立っている場所にはいなかったでしょう。私は今も、そしてこれからも学ぶ者であり、また誤る者でもあります。

私たちは二人とも、自由で民主的な国で育ちました。男女同権の法律のある国です。もっとも、今日に至るまで女性は不利な立場に置かれていますが。私はドイツと西洋の文化圏について話しています。私たちはまだ戦争を経験したことがありません。飢饉も経験したことがありません。今年、私たちは自分たちの世代で初めてのパンデミックを経験しています。永遠に揺るがない安全と成長という感覚が、初めて揺さぶられているのです。

これまでのこうした非常に恵まれた人生経験が、私たちの考え方と、ほかの文化圏に対する私たちの見方を形づくっています。私は、同権を現代の民主主義が勝ち取った祝福に満ちた成果だと考えています。それは、決して神のみこころにかなうものではない奴隷制の廃止に比べることができます。

このことに触れるのは、私たちの社会化が（排他的な）ブレザレン運動の考え方によって決定づけられていたからです。そこでは男性と女性は同じ価値を持つと見なされてきましたし、今もそう見なされていますが、女性は教会の礼拝への参加から締め出されています。女性は従属的な立場にあります。女性は男性の助け手です。男性はかしらであり、結婚において指導権を持っています。そうすることで、神のことばに従順であると信じているのです。聖書に忠実である、と。

そのような確信を持つことはできます。しかし、それが今日の生活の現実にとどの程度合っているのか、そもそも合いうるのか、と問うことは許されるでしょう。私の結婚生活はどのようなもの

だったでしょうか。そして、確信をもって両性の異なる地位や権威を生きようとしている両親や祖父母、そして今日では友人や知人の結婚生活を、私はどのように見てきたでしょうか。

結婚生活の初めの頃、私は多くのことを自分一人で、妻と相談せずに決めていましたが、今ではそういうことはほとんどしません。私たちは、チームとして決め、行動したときに、いつもいちばんうまくいきました。尊敬と愛は一方通行ではありません。互いに分かち合い、ともに生き、対等な立場で語り、聞くこと、それが理想的な状態です。だれにでも強い時期と弱い時期があります。必要なときにはいつでも——そしてそもそもそれが普通のことですが——互いに補い合うのです。いつも男性が先に立つわけではありません。女性であることもあります。交互に。補い合いながら。話し合いながら。開かれた心で。正されることを受け入れて。耳を傾けながら。ともに祈りながら。それが、私が経験している生活の現実です。それ以外のものは後退でしょう。私は、古代オリエントの、アブラハムやダビデの時代のような結婚生活を送るつもりはありませんし、送ることもないでしょう。イエスの時代のようにでもなく、宗教改革の時代のようにでもありません。私の祖父母のようにでもありません。その点について、21世紀に生きていることを私は感謝しています。

さて私は、男女の問題において聖書に忠実に生きていると考えている人々も、実際には私たちとほとんど違う生き方をしていることに気づきます。彼らの結婚生活もまた、一方的なものではなく、同権によって、一つであることの中にある二人であることによって特徴づけられているのです。つまり私が言いたいのは、例外を別にすれば、パウロとペテロが描いているような（これらのテキストについては詳しく取り上げます）キリスト者の結婚生活を、私はどこにも見えないということです。むしろ反対に、これらの妻たちは夫たちと対等な立場で歩んでいます。彼らはたいていチームなのです。女性は夫を操ったり支配したりしようとしているのだという一律の決めつけは、不公平です。たとえそういうことがあるとしてもです。罪は、どの結婚生活においても、小さな、あるいは大きな火種であり続けます。けれども、互いに良い関係にあれば、その火はたいてい消し止められるのです。

この本の中で私が、今述べたような結婚についての立場と、教会における女性の別の役割を主張し、その根拠を示すなら、それはある人々の間に無理解、拒絶、驚き、そして憤激を引き起こすでしょう。自分の確信を主張することには、いつも代価が伴います。とりわけ、自分の教会や友人たちの立場に反対して論じる場合にはそうです。私は、古い保守的な立場への敬意をもってそうします。私はそれらを誤りだと考えていますが。それらは神の御霊を弱め、御霊に逆らっています。すべての読者が、この本の最後まで読み通してくださることを願っています。私の本の内容についての対話は、本全体を読んでもいただいたうえでなら、喜んでいたします。

議論が事実在即しており、決めつけのないものであるかぎり、どうぞ遠慮なく私に手紙をお寄せください。特にこうした問いにおいては、議論がしばしば熱を帯びて事実から離れ、ときには個人攻撃になって人を傷つけるものになることを、私はよく知っています。

だれもが神の前で自らを吟味し、私たちの認識は部分的に、また一歩ずつ進むものであって、周囲の環境とその時代によって強く形づくられているということを認めるべきです。

若い頃から、私は聖書を読むように勧められてきました。毎日。そしてそれを学ぶようにと。私はそうしてきました。「集会」で受けた良い聖書的な土台に、私は感謝しています。この本は、もしそのように解釈しようとする人がいるとしても、私の過去に対する告発でも、その清算でもありません。いずれにせよ、聖書を学ぶことは、ごく若い頃から私の趣味となり、それ以上のものとなりました。そして今日までそうあり続けています。当時の私は、尊敬される聖書の教師になりたいと思っていました。私の手本とした人々のように。そのうちの何人かは今も存命です。その動機はもうずっと前になりました。さて、それほど多く、また熱心に聖書を学ぶとき、そこからどのような認識が生まれてくると私たちは考えるのでしょうか。いつもいつも同じことでしょうか。

聖書を学ぶとき、ときにはイスラエルのように、目におおいが掛かっていることがあります（コリント第二3:15）。私たちはしばしば、聖霊がおられるにもかかわらず、いつも同じものしか見ていません。けれども、繰り返し繰り返し聖書を学ぶ人は、この御霊が突然何か新しいものを示してくださったとしても、驚くべきではありません（マタイ13:52）。たとえ2000年近くたった後であってもです。神のことは汲み尽くせないものではないのでしょうか。神学者や聖書学の助けによっても、また聖書を学んでいる聖書学校や神学校の助けによってもです。教会における、結婚における、そして神の王国における男性と女性というこの一連のテーマにおいて、何世紀にもわたって唯一正しいと信じられてきた認識とは異なる、新しい、あるいは別の認識が現れたとしても、それだけの理由ですぐに退けるべきではありません。このテーマは救いを左右するものではありませんし、私たちはあたかもそうであるかのように振る舞うべきではありません！ それはまさに、聖書への忠実さの試金石ではないのです。

何十年にもわたって大切にしてきた真理を問い直さなければならないことが何を意味するか、私は経験から知っています。聖書の証言が、ずっと考えてきたほど、あるいは教えられてきたほど、明白でも明快でもないからです。考えを改める過程は痛みを伴います。それは私たちに何かをもたらします。それは、私たちがどれほど誤りやすく、無力で、ただ神に頼るほかない存在であるかを示します。私たちは神に向かって嘆くことができ、自分の無知や問い、そして疑いをも神のもとに持っていくことができます。そして、自分の教会の環境の中だけで暮らし、自分の世界を唯一正当な、あるいは聖書に忠実な世界だと思い込んでいるところで、気づかないうちに生じた「職業的な盲目」（Betriebsblindheit）をも。

数年間、私は聖書ギリシア語のフォーラムに参加していました。多くのことが話し合われ、建設的に議論されました。この本のテーマも議論されました。当時私は多くのものを集め、今それを読み直しました。数年の距離を置いてみると、議論が結論を開いたままにしていたことは、まれか、まったくなかったことに気づきます。言語能力がどれほど高くても、ある立場に対する事前の決定と刷り込みが、賛成か反対かの議論を決定づけていたのです。この場合で言えば、女性が礼拝でそもそも何かを話してよいのか、今日でも頭をおおうべきなのか、ということについてであり、教えることや指導することについては言うまでもありません。聖書を使えば、本当に何でも証明したり反証したりできるのでしょうか。

私は、このテーマについて書くつもりはまったくありませんでした。それは論争の的であり、争いの絶えない領域です。地雷の埋まった土地です。ここでは栄誉を得ることはできません。私の時間は、神の国のほかの事柄のために十分に用いることもできたでしょう。けれども私は、個人的にそれをするように召されていると知っていました。時代精神に迎合していると決めつけられることでしょう。それに対して私にできることはありません。私は、世が闘い取ろうとしている解放主義的な立場を擁護しているわけではありません。私の道は、聖書が私に教えていることでありたいのです。

あなたのみことばは、私の行くところを照らします。それは私の道の光です。

あなたがみことばの中で証ししておられることは、驚くべきことに満ちています。それゆえ私は心を尽くしてそれを守ります。

詩篇119篇105節、129節（ノイエ・ゲンファー訳〔Neue Genfer Übersetzung NGÜ、ドイツ語聖書翻訳〕）

試し読みはここまで

本の全体（約300ページ）は、ペーパーバックとして著者から直接、またKindle電子書籍としてAmazonでお求めいただけます。

www.hans-joerg-ronsdorf.de

注

1. 私はほとんどの箇所で、はっきりさせるために、この語の女性形（Ältestinnen＝女性の長老たち）を用いています。今日一般的であり、聖書の原語においてもそうであるのは、女性形をも含む総称的な男性形（ドイツ語ではÄlteste）です（6.4.1を参照）。
2. Wunderli, 53, "Ihm gegenüber": Geschlechter-Gleichberechtigung in der Kirche und was die Bibel dazu (nicht) sagt, 2020